

小地域を基盤とした高齢者の社会参加活動を 促進するソーシャル・キャピタルの形成に関 する実証的研究

蘇, 曉娜 / SU, Xiaona

(発行年 / Year)

2024-03-24

(学位授与番号 / Degree Number)

32675甲第607号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2024-03-24

(学位名 / Degree Name)

博士(人間福祉)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00030518>

博士學位論文
論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	蘇 暁那
学位の種類	博士（人間福祉）
学位記番号	第 868 号
学位授与の日付	2024 年 3 月 24 日
学位授与の要件	本学学位規則第 5 条第 1 項(1)該当者(甲)
論文審査委員	主査 教授 宮城 孝 副査 教授 伊藤正子 副査（学外）東洋大学教授 加山 弾

小地域を基盤とした高齢者の社会参加活動を促進する
ソーシャル・キャピタルの形成に関する実証的研究

I 本論文の受理および審査の経過

蘇 暁那氏より、2023 年 9 月 29 日に博士学位請求論文が提出された。同年 10 月 4 日の人間社会研究科教授会において受理審査委員会（委員長：高良麻子、委員：宮城 孝、伊藤正子、野田岳人）が設置され、同年 10 月 18 日に論文受理審査委員会を開催し、協議した結果、本論文が本研究科における博士学位請求の要件を満たしていることを確認し、受理することを決定した。なおその際、一部内容の加筆・修正の要望がだされ、指導教員より伝えることとし、その受理審査委員会審査報告が、同年 10 月 25 日の本研究科教授会にて承認され、同時に、審査小委員会が設置され同論文の審査が委託された。

本審査小委員会は、同年 12 月 22 日 15 時 00 分から 16 時 40 分まで、蘇氏の学位請求論文についての口頭試問を実施した。その結果、一部の内容について追記や加筆・修正することを条件に、3 名の審査小委員会全員が博士（人間福祉）の学位授与が妥当であると判断した。主査・副査は、指摘された内容の加筆・修正について確認したので、ここに博士論文審査委員会（研究科教授会）に報告いたしたい。

以下は、本論文の概要とそのコメント、審査結果である。

II 本論文の概要

1. 研究の背景と目的

筆者は、本研究の背景として、日本では総人口が減少している中、欧米諸国の約 2 倍のスピードで高齢化が進んでおり、独居高齢者の急増に伴い、2000 年以降高齢者問題の一つとして、孤独死や無縁社会など、大きく社会的孤立の問題が取り上げられていることをあげて

いる。また、内閣府の全国調査では、一人暮らしの 60 歳以上の高齢者の約 5 割が「孤独死を身近な問題と感じている」（高齢社会白書 2021）との結果が示されており、社会関係やコミュニケーションの希薄化により、今後社会的孤立に陥るリスクが高い高齢者がさらに増加することが危惧されるとしている。

高齢者の社会参加活動の促進は、独居高齢者の孤独死の予防や介護予防などの効果が期待されているが、日本においては、高齢者の社会参加活動の代表的なものとして、町内会や自治会単位に組織化され活動している老人クラブの数や会員数などの減少傾向が止まらない状況にある。また、市町村社会福祉協議会が全国的に推進している日中独居高齢者向けのふれあいいきいきサロンはほとんどの参加者が女性であり、健康へ関心を持っている高齢者や社会参加活動に積極的な高齢者しか参加できない状況にあり、これらから地域における高齢者の社会参加活動の場としての限界性が明らかになってきていることを問題の所在としてあげている。

筆者が述べるように、超高齢社会となった日本において、高齢者が社会的に孤立することを防止し、社会参加に結びつけるためには、高齢者が居住する地域において、いかに社会参加活動を活性化し、各高齢者にマッチした活動へ参加を促進することができる社会的基盤を形成することが、非常に重要な課題であると言える。

そこで、本研究では、これまでの高齢者の社会参加に関するソーシャル・キャピタル機能が脆弱化していることを重要な社会的な問題として認識した上で、超高齢化が進んでいるにもかかわらず、趣味や生きがい活動、また関係機関との協働により高齢者の社会的孤立の防止を図り社会参加活動が活発に行われている島根県松江市湊北台地区に着目し、この地域において、いかに高齢者の社会参加活動を促進するソーシャル・キャピタルが形成されたのかとの問いかけから研究に着手している。

そして、この問いに対して、第一に、この地域において高齢者の社会参加活動を促進するソーシャル・キャピタルの醸成に、地域のどのような歴史的、人為的要因などの文脈が関連しているのか、第二に、小地域における高齢者の社会参加活動を促進する環境的な要因としてソーシャル・キャピタルは、どのような特徴を持っているのか、第三に、これらの特徴は、高齢者の社会参加活動の促進と社会的孤立の予防にいかに寄与しているのかについて考察し、そこから今後の超高齢社会における地域を基盤とした高齢者の社会参加活動の促進に寄与することを本研究の目的としている。

2. 本論文の構成と内容

本研究は、以下の通り 6 章によって構成されている。

第 1 章 研究の概要

第 1 節 問題の所在と研究の目的

第 2 節 研究方法

第3節 用語定義

第2章 高齢者の社会的孤立の予防における高齢者の社会参加活動及び

ソーシャル・キャピタルに関する先行研究及び本研究の位置づけ

第1節 高齢者の社会参加活動の現状と課題

第2節 先行研究における高齢者の社会参加活動の規定要因

第3節 地域における高齢者の社会参加活動とソーシャル・キャピタルに関する研究

第4節 高齢者の社会参加活動が活発な地域の取り組みからみた環境的な促進要素

第5節 本研究の位置づけ

第3章 ソーシャル・キャピタルの醸成における地域の文脈的要因に関する分析

—松江市淞北台地区の歴史に着目して—

第1節 調査の概要

第2節 調査の結果

第3節 まとめと考察

第4章 高齢者の社会参加活動を促進する主観的認識に関する量的調査の分析

第1章 量的分析の概要

第2節 調査の結果

第3節 まとめと考察

第5章 高齢者の社会参加活動の促進要因に関する質的調査の分析

第1節 質的分析の概要

第2節 調査の結果

第3節 まとめと考察

第6章 総合的考察

—高齢者の社会参加活動を促進するソーシャル・キャピタルとは—

第1節 研究全体の総括

第2節 高齢者の社会的孤立を予防するためのソーシャル・キャピタルとは

第3節 高齢者の社会参加活動を促進するソーシャル・キャピタルの普及に向けて

第4節 本研究の意義と今後の課題

・引用・参考文献

各章の概要は、以下の通りである。

第1章では、高齢者が増加しているとともに、独居高齢者の急増と社会的孤立のリスクの拡大といった課題に言及した上で、高齢者の社会参加活動の重要性を提起している。その一方、従来の地域における高齢者の社会参加の場としての老人クラブの数や会員数が急激に減少するなど、高齢者の社会参加に関するソーシャル・キャピタルが機能として脆弱化していることが重要な社会的な問題となっていることを、本研究の問題意識としてあげている。

第2章では、第1章であげた本研究の問題意識の背景を踏まえ、これまでの高齢者の社会

参加活動に関する政策の現状と課題及び高齢者の社会参加活動に関する先行研究についてレビューし、本研究の位置づけを明らかにしようとしている。

これまでの高齢者の社会参加活動に関する研究は、社会参加活動を促進、また阻害する要因として、年齢や学歴、経済的要因、健康度、居住年数などの個人的な規定要因に関するものが多く、本研究の独自性として、高齢者個人と地域的な環境との間の接点に焦点を当て、そのインタラクティブな視点による双方のつながりを高めるような社会参加活動のあり様を探ることをあげている。

第3章では、先行研究の限界性を踏まえて、超高齢化が進んでいるにもかかわらず、趣味や生きがい活動など、長期にわたり高齢者が主体となったグループ活動などが非常に活発に行われている島根県松江市淞北台地区（2020年3月現在 高齢化率 39.1%、要介護認定率 18.7% 最も多い住民の年代層は 80 代前半層）に着目し、小地域における高齢者の社会参加活動を促進する環境的な要因としてのソーシャル・キャピタルの形成過程には、どのような地域の文脈が関係するのかを明らかにするため、文献研究及びインタビュー調査を行った上で分析をしている。

その結果、淞北台地区のソーシャル・キャピタルの形成過程は、①【大渇水の危機によるつながりのはじまり】、②【共同事業による住民共同体意識の強まり】、③【地域の関係機関を巻き込んだネットワークへの拡大】の三つの発展段階に分けられるとしている。そして、これらの経過を踏まえて、淞北台地区における歴史的経過から形成されてきた地域住民の行動規範と行動様式、その認識及び共通課題の解決に向けての取り組みなど人為的要因などから高齢者の社会参加活動に関するソーシャル・キャピタル醸成の要因を考察している。

第4章では、小地域における高齢者の社会参加活動を促進する環境的な要因としてのソーシャル・キャピタルは、どのような特徴を持っているのかを明らかにするため、淞北台地区の高齢者 257 名に社会参加活動における参加状況、活動の参加のしやすさや住民相互の関係性など、参加を促進する環境要因についてアンケート調査を行い、因子分析を行っている。

その結果、【地域住民との協力による地域とのつながり】【地域活動への参加のしやすさ】【地域貢献への主体的な取り組み】【満足感や自己効力感の獲得】の4つの因子が抽出されている。また、淞北台地区における高齢者の社会参加活動を促進するソーシャル・キャピタルの特徴として、【地域住民との協力による地域の繋がり】という認知的なソーシャル・キャピタルの要素が確認された一方、構造的なソーシャル・キャピタルの特徴として、【活動への参加しやすさ】があげられ、これらは常に密接な関係を持っており、相互作用をしながら【地域貢献への主体的な取り組み】【満足感や自己効力感の実現】を促進しつつ個人の参加活動に寄与していることが確認されたとしている。

第5章では、このような環境的な要因が、どのように高齢者の社会参加活動の促進と社会的孤立の予防に寄与しているのかを検討するために、淞北台地区におけるグループ活動等に主体的に参加している高齢者 14 名に対してインタビュー調査を実施し分析を行っている。

そして、社会参加活動の主体的な参加者である高齢者における参加動機ときっかけについて分析した結果、【自分なりの目的意識】【活動に参加したきっかけ】の2つのカテゴリーが抽出された。また、参加の継続要因として、【参加のしやすさ】【自分個人としての楽しみ】【強みを活かす】【ニーズが充足される】の4つのカテゴリーが抽出された。さらにそれらのカテゴリー間の影響の関係性を分析している。

これらの結果に関する考察として、参加する当事者である高齢者の有するストレングス（強み）の活用を重要なポイントとして提示し、それと参加しやすい環境要因と相互作用して初めて、参加者の主体性が引き出され、参加促進につながることを示されたとしている。また、地域の協力を得て、高齢者個人の身体状態の維持向上（＜介護予防に役立つ＞＜安否確認に繋がる＞）や主観的幸福感の向上（＜活動が楽しい＞＜成長ができる＞＜人の役に立つ喜び＞）という意義をもつと同時に、活動参加を通し＜知り合いが増える＞ことで、社会的孤立の予防にも効果があるとしている。

第6章では、総合的考察として、これらの調査結果を踏まえ、先に述べたように高齢者の社会的孤立の予防における社会参加活動を促進するソーシャル・キャピタルの有効性について考察を行っている。そして、一般的に高齢者の社会参加活動について検討する際には、体の衰えや活動が行われている場所にいけない高齢者、参加に消極的な高齢者にいかに働きかけをするかが求められるが、湊北台地区では、各種活動の案内状を配りながらの声かけや見守り、活動の会場まで送迎するなど、高齢者自身が孤立しがちな高齢者への参加を広げるための活動が展開されている。さらに、地域包括支援センター、民生委員及び社会福祉協議会による定期的な情報交換会を行っており、個別的に課題のある一人暮らし高齢者に対応するネットワークの構築がなされているとしている。

さらにこれらの点から、このような高齢者の社会参加活動におけるソーシャル・キャピタルが他の地域へ普及可能なポイントは何かにについて考察を行っている。それらは、具体的には、①垂直的なつながりから水平的なつながりへ ②関心事から始まる課題への認識・啓発 ③当事者の可能性・持つ力を引き出す ④役割及びきっかけを用意し多くの人の出番を作る ⑤利用可能な外部関係機関のサポートを求める ⑥環境整備におけるコーディネート機能の充実の六つを挙げている。

筆者は、本研究の学術的・社会的意義の第一として、本研究は、高齢者の社会参加活動が活発な地域のローカルな文脈に着目し、これまで先行研究に見られた高齢者の個人的な要因だけでとらえるのではなく、高齢者にとって暮らしの場である小地域において、活動の参加のしやすさや住民相互の関係性など、地域における社会参加を促進するソーシャル・キャピタルの環境要因を明らかにした点にあるとしている。また、第二の意義として、これまでの先行研究では、社会参加の効果として、参加した高齢者個人の身体状況の維持向上や主観的幸福感の向上といった研究が大半であったが、社会参加活動を通して作られた地域のソーシャル・キャピタルの形成が、地域における高齢者の社会的孤立の予防に有効に機能している点を明らかにしたことは、今後の高齢者の社会参加活動と社会的孤立の予防に新たな

視点をもたらしたと述べている。

筆者は、本研究の限界として、第一に、本研究の対象が限定された地域を調査対象としたため、その地域特性や対象とした高齢者の特性が影響していること、その点で他の地域との比較分析が必要であることをあげている。本論文でもあげているが、松江市では、近年淞北台地区にならって、淞北台地区に近い成果を上げている地区も表れている。また、全国的にも同じような成果を上げている地域も散見される。今後は、このような地域における高齢者の社会参加活動を促進するソーシャル・キャピタルの分析を行い、その普及の可能性をさらに検証する必要があると述べている。

第二に、本研究は、社会参加活動に主体的に参加している高齢者へのインタビュー調査の結果を分析しているが、地域における社会参加活動に積極性を持っていない独居高齢者など社会的に孤立しやすい方へのインタビュー調査まで至ってなかった点を研究の限界性としてあげている。

最後に、今後の研究の方向として、高齢者の社会参加活動が活発な先進地域について、地域特性に配慮しながら研究の対象地域を広げ、本地域と異なる地域特性を有する地域における調査研究を視野に入れてさらに検証を深めていきたいとしている。

Ⅲ 審査結果

本研究の内容を端的に表現すると、超高齢社会において、高齢者の生きがいや健康、社会的孤立を防止する上で、地域における社会参加活動が重要視されているが、これまでの町内会・自治会、老人クラブ、ふれあいいきいきサロンなどの地縁組織を基盤としたソーシャル・キャピタルの脆弱化が進行し、その限界が顕在化する中で、全国的に先進的な地区について、高齢者の社会参加活動を促進するソーシャル・キャピタルが形成された地域の歴史的・人為的要因、またその特徴と具体的な内容について、量的・質的な調査結果に基づいて実証的に探究したものと言える。

本研究の学術的意義、また独自性において評価できる点として、本研究でも指摘されているように、近年これまでの伝統的な地縁組織を基盤とした高齢者の社会参加活動の限界が顕在化している状況下にあつて、先進的な地区における実証的な検証を通じて、ソーシャル・キャピタルの視点から新たな高齢者の社会参加活動のあり様を提起した点にあると言える。ソーシャル・キャピタルの研究は、社会学など多くの領域でなされているが、社会福祉学における研究は少なく、その点でも新規性に富むと言えよう。

またこの領域における実践として、近年生活支援コーディネーターが関与しての通いの場づくりが全国的に展開されているが、高齢者個々のストレングスに着目し、参加のしやすさや水平的な関係などの環境的要因、そして、満足感・自己肯定感の獲得などに着目し高齢者個々人が有するストレングスや志向性を活かし地域のソーシャル・キャピタルとしてインタラクティブに形成する必要性についての提起は、今後の高齢者の社会参加活動の展開に大いに示唆に富む内容であると考ええる。また、研究方法の妥当性、体系性の点でも評価で

きる。

日本は、急速に高齢化が進展しており、特に今後、大都市部において高齢者が急速に増加することが予測されている。コロナ禍の影響もあり、独居高齢者の孤独死の増加も指摘されている。本研究の限界や課題について筆者も述べているが、同じように高齢者の社会参加活動が盛んな地域について、その地域特性も含めて、その促進要因や阻害要因を検証していくことを期待したい。本研究が対象とした地区のように、同じように超高齢化した地域であっても、住民の主体性が発揮されにくい地域やコミュニティが脆弱な地域も全国には多く存在する。その際の生活支援コーディネーターや社会福祉協議会などの関係機関の関与のあり方などについても探求することを期待したい。

また、本研究の主たる対象は、社会参加活動に積極的な高齢者に対してのインタビューであったが、社会参加活動に消極的、拒否的な社会的に孤立している高齢者に対する効果的なアプローチのあり方やその効果について、今後さらに探求することを期待したい。

残された課題はあるものの、本論文は、一連の分析方法や文章表現は適切であり、十分に学術的な価値と体系性を有していると言える。

以上の点から、本学位請求論文は、法政大学大学院人間社会研究科人間福祉専攻の学位 博士（人間福祉）の基準を満たしているものと判断される。